

映画『少女邂逅』とイマジナリー・コンパニオン

－移行対象としての機能と実在感について－

○恒吉徹三

(山口大学教育学部)

はじめに

イマジナリー・コンパニオン imaginary companion (以下 ic) とは、自らの想像だと認識した上で、目の前にまるで人がいるように対話し遊ぶことができ、内的世界から描き出される対象である。主に幼児期に出現して消え、想像上の仲間、空想の友だち等と訳される。犬塚・佐藤・和田 (1990) は文献を展望し、孤独感や無視・拒絶で生じる淋しさを埋めることなど8つの機能を見出している。出現しては消える対象であり、移行対象との併存性も指摘されているが、ic そのものの機能として捉えられていない。また、専門用語としての必然性でもあるが、「想像」「空想」「イマジナリー」という形容は、実在感を感じ取りにくくしていると演者は考えている。大学の講義で説明しても体験のない学生にはリアルに描き出せないため実例が必要となる。現象としても健康なものであり、伊崎 (2006) はアニメ『となりのトトロ』を取り上げ、環境の失敗から自己を守る機能を指摘している。ic も移行対象も、なだめ、支える機能の点では共通している。

本発表では、映画『少女邂逅』を通して、ic の移行対象としての機能とその実在感について検討する。

映画『少女邂逅』のあらすじ

この映画は、音楽と映画のコラボレーション企画である MOOSIC LAB2017 での枝優花監督作品である。主人公のミュリ (保紫萌香: 現穂志もえか) は、クラスメート (里内伽奈ら) のいじめで声も出せなくなり、林の中で地面に押し倒され、放置され、リストカットしようとし、手首に這い上がってきたカイクを「ツムギの部屋」と書いた箱で飼い、カバンに入れて持ち歩く。いじめられて林の中に投げ捨てられ、地面に倒れているところに白い服の「つむぎ」

(モトローラ世理奈) が手を差し伸べ、同じクラスに転校してきて友だち関係が始まる。さらに、別のクラスメート (根矢涼香ら) と弁当を食べ、カフェに出かけ、声を出して話もできるようになる。ある日ミュリが廊下に落ちている糸を辿ると、教室でリストカットしているつむぎにつながっており逃げ出す。

ミュリは、つむぎに誘われて学校をさぼって旅行する途中、電車を乗り継ぐ駅のベンチでうたた寝し

ているつむぎを置き去りにして帰宅する。その後、二人は疎遠になり、ミュリは、卒業後に駅に見送りにきたクラスメート (土山茜) から、つむぎが部屋の隅で餓死したことを聞かされる。

考察

イマジナリー・コンパニオンとしての「つむぎ」の存在と移行対象としての機能について

「つむぎ」を主人公の ic として捉えたのは、カイクと同じ名前、捨てられた同じ林の中から登場し、転校してくる設定からである。ところが、友だちと共有されている点は一般的ではないが、ic との二者関係が映画の中心で、仲間とつないで欲しい主人公の願望の映像化と捉えることで ic として理解できる。

ic は年齢が上がる则自己やその理想と重ねられる点も指摘されており、途中までは理想の友だちであり、動き出すミュリとは裏腹に ic は情緒的に揺らぐ。つまり、青年期の自己形成過程での揺らぐ自己を対象化する役割を果たしており、大学生を対象とした山口 (2007) が、私でありながらも完全には私ではない存在と指摘し、山岸 (2017) が思春期の主人公と ic の関係は、自分を振り返る機能だと指摘した知見とも一致する。

一方で、ミュリを情緒的に支えて言葉を取り戻し、他者とつなぐ役割を果たすと消える点で移行対象として機能している。ただ、糸をたぐるように繋がりを求めながらも怯えて逃げ出しては近づき、また自ら断ち切るなど、危機的に揺らぎながらつなぎ、そして消えていくという機能を明瞭に描き出している。

イマジナリー・コンパニオンの実在感について

映画としての虚構性は、空想的な存在をリアルに描き出して、講義の素材として活用することで実体験がない大学生の理解を広げることできる。しかし、映画を観ていない段階では、絵空事のように捉えられ、他者と共有できない当事者の感覚の追体験ともなる。

文献 (映像資料)

- (株) スポテッドプロダクションズ・枝優花 (2018): 『少女邂逅』パンフレット
 「少女邂逅」フィルムパートナーズ (2017): 『少女邂逅』[Blu-ray], 発売元 PONY CANYON.